

Abhisamayālaṃkāṛālokā XVI における

「離一多自性論証」の和訳 (2)

——不二知 (advaya-jñāna) を中心に——

現観莊嚴論光明研究会

研究会メンバー 間中充 (龍谷大学世界仏教文化研究センター客員研究員)
秦野貴生 (大谷大学任期制助教)
道元大成 (龍谷大学大学院)
北山祐誓 (龍谷大学大学院)
中山慧輝 (日本学術振興会特別研究員 DC2)

はじめに

本稿は、前稿 (現観莊嚴論光明研究会 [2019]) に引き続いて、ハリバドラ (Haribhadra, 800 頃) が著した *Abhisamayālaṃkāṛālokā* (『現観莊嚴論光明』, 以下 AAA) の中に見られる「離一多自性論証」の和訳を試みたものである¹。この箇所は、*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* (『八千頌般若経』) 第 XVI 章 Tathatāparivarta (真如品) の中に挿入されている議論であり²、その内容はおおよそカマラシーラ (Kamalaśīla, 740–797 頃) の著書 *Madhyamakālaṃkārapañjikā* (『中観莊嚴論細注』) に沿う形で構成されている³。しかし、カマラシーラのそれはチベット語訳でしか伝承されていない。そのため、梵文テキストが現存しているハリバドラの AAA は、ジュニャーナガルバ

¹ AAA を翻訳するにあたり、2017 年から 2018 年にかけて龍谷大学で研究会が開催された。そこでは、主に大学院生が下訳を準備し、他文献との関連箇所やチベット語との解釈の違いなどを整理したものを、桂紹隆氏を中心として、一郷正道氏・沖和史氏・五島清隆氏らを交えて検討するという形でテキストを読み進めていった。本稿はその研究成果の一部である。

² AAA と、*Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* (『二万五千頌般若経』), その注釈である *Abhisamayālaṃkāra* (『現観莊嚴論』), *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* (『八千頌般若経』) との関係については、現観莊嚴論光明研究会 [2019: 119] などを参照。

³ Cf. 一郷 [2015: xiii–xiv].

(Jñānagarbha, 8 世紀頃) や *Madhyamakālaṃkāravṛtti* (『中観莊嚴論頌自注』) を著したシャーンタラクシタ (Śāntarakṣita, 725–784 頃) を含む、いわゆる「瑜伽行中観派」と呼ばれる学匠たちの思想や見解を解明することに、大いに役立つものである。

当該箇所では、「諸存在は、一多の自性を欠くから、勝義としては無自性（空）である」という論証式について、「証因は不成立 (asiddha) ではない」、「証因は矛盾 (viruddha) ではない」、「証因は不確定 (anaikāntika) ではない」などと論じることによって、離一多自性性が正しい証因であることを立証する。そして、最後にハリバドラが自身の見解を述べる。

ハリバドラは、まず「証因は不成立ではない」と主張するための主張命題の主題である諸存在に関して、それを所知と能知に区分する。前稿では、所知について極微論を基にした議論を扱ったが、本稿では、もう一方の能知の考察に移り、唯識説の紹介に続いて、不二知 (advayañāna) に関する形象真実論批判と多様不二論批判との箇所を扱う。

エディション

AAA の刊本として、以下の 3 本が存在する。

- Wogihara Unrai ed. *Abhisamayālaṃkāṛ'ālokā Prajñāpāramitāvyākhyā* (Commentary on *Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā*) by Haribhadra, Together with the Text Commented on, Tokyo: The Toyo Bunko Publications, 1932–1935.

Wogihara は、AAA の梵文テキストを作成するにあたって、S. Lévi が所持していた写本をローマナイズし書き写したもの（以下、MsP）と Calcutta Library 所蔵の写本コピー（以下、MsC）の 2 写本とチベット訳を基に校訂を行っている。また、同年の 1932 年に Tucci も AAA の梵文テキストを刊行しているが、Wogihara は Tucci 本には間違いが多くあることを指摘し、自身のエディションについても写本筆記者の誤表記のために、訂正すべき箇所が散見していることを認めている。エディションの途中からは、必要に応じて Tucci 本の読みを採用している。

- Vaidya, P. L. ed. *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā With Haribhadra's Commentary Called Āloka*, Darbhanga: Buddhist Sanskrit Texts 4, 1960.

Vaidya は、1960 年に Wogihara 本と Tucci 本を参照しつつ、梵文テキストを刊行している。写本については詳しく言及していない。また Vaidya 自身は、Wogihara 本が Tucci 本よりも評価できると指摘している。

- Tucci, Giuseppe ed. *The Abhisamayālaṃkāṛāloka of Haribhadra: being a commentary on the Abhisamayālaṃkāṛā of Maitreyañātha and the Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā*, Gaekwad's Oriental Series No. XLII, Baroda, 1932.

Tucci は、Wogihara 本と同年の 1932 年に、以下の写本を参照し、梵文テキストを刊行している。

(1) The Asiatic Society of Bengal のネパール写本（以下、MsA）

- (2) S. Lévi から譲り受けた Durbar Library の写本コピー (以下, MsB)
 (3) 上記の(2)とは別の, Durbar Library 所蔵の写本

翻訳研究

AAA の離一多自性論証に関しては, 以下の2つの翻訳がある.

・Moriyama Seitetsu "The Yogācāra-mādhyamika Refutation of the Position of the Satyākāra and Alīkākāra-vādins of the Yogācāra School, Part 1: A Translation of Portions of Haribhadra's Abhisamayālaṅkāra-lokā Prajñāpāramitāvyākhyā," 『佛教大学大学院紀要』12, pp. 1-58, 1984.

・一郷正道 『ハリバドラの伝える瑜伽行中観派思想』, 東本願寺出版, 2015.

これらは, 既刊校訂本をすべて参照しておらず, また翻訳や解釈にも少なからず改善すべき点が見られる.

凡例

以下では, AAA の梵文テキストを再校訂し, シノプシスに従って和訳と対照させて見開きの形で提示する. 梵文校訂テキストは, Wogihara 本を底本として, 適宜 Tucci 本及び Vaidya 本を参照し, 最良と思われる読みを採用した. その際, Wogihara 本が脚注で言及している写本 (MsP, MsC) と Tucci 本が Appendix で言及している写本 (MsA, MsB) の異読については, それぞれを転載する形で適宜提示した. 梵文テキストにおいて, 分節記号の有無や連声規則の標準化, avagraha などの異読は逐一注記しなかった.

また, 便宜上, AAA とパラレルの箇所があるもの (主に MAV や MAP, TSP など) は左頁の脚注部分にその梵文テキスト乃至は蔵文テキストを記載し, 右頁の脚注部分に, MA 及び MAV の翻訳のみを一郷 [1985]を転載する形で配置した.

チベット訳も参照し, Wogihara 本と Tucci 本が異読として提示しているものをそれぞれ転載した. 蔵文テキストについては, デルゲ版及び北京版のロケーションのみを示した.

和訳において, 文脈上訳者が補った文言については □ で示し, 訳者による言い換えや原語を挿入する場合は () で示した.

《シノプシス》

前稿で扱った箇所と本稿で扱った箇所のシノプシスを以下に提示する。尚、論証式には前稿からの通番号を付し、シノプシス中に記した。

0. 【論証式 1】諸存在は、一多の自性を欠くから、勝義としては無自性（空）である。
1. 証因は不成立（asiddha）ではない。
- 1.1. 「存在」とは何か。目的を実現するものである。
- 1.2. 存在は所知のものと能知のものと二種である。
- 1.2.1. 所知の存在一極微論の吟味
 - 1.2.1.1. Vaiśeṣika の極微論批判（avayavin 論批判）
 - 1.2.1.2. Vaibhāṣika の極微論批判【論証式 2】
 - 1.2.1.3. Sautrāntika の極微論批判
 - 1.2.1.4. Śubhagupta の極微論批判

[小結論：所知の存在（＝外界対象）は一でもなく、多でもない.]

—————以上、前稿で扱った箇所—————
- 1.2.2. 能知の存在一瑜伽行派の形象論の吟味
 - 1.2.2.1. 瑜伽行派：不二知（advayajñāna）は一であり、諸形象がそこに顕現する。
 - 1.2.2.2. 諸形象は真実か虚偽か。
 - 1.2.2.2.1. 瑜伽行派の形象真実論批判
 - 1.2.2.2.1.1. 形象が多であるから、識も多であり、知不二論は否定される。
 - 1.2.2.2.1.2. 瑜伽行派の同種多識俱起説批判
 - 1.2.2.2.1.2.1. シャーキャブッディ：同種の多数の識が同時に生じる。
 - 1.2.2.2.1.2.2. 極微論批判の適用
 - 1.2.2.2.1.2.3. 同時に多数の識が生じるならば、分別知は継起しない。
 - 1.2.2.2.1.3. 瑜伽行派の多様不二論批判
 - 1.2.2.2.1.3.1. 多様不二論者：多様に顕現する識は単一である。瑪瑙のように。
 - 1.2.2.2.1.3.2. 識は単一ではない。【論証式 3】
 - 1.2.2.2.1.3.3. 多様不二論者：多様性と単一性とは相反しない。
 - 1.2.2.2.1.3.4. 多様性とは多数性であるから、単一性とは相反する。瑪瑙の喩例も不適切である。
 - 1.2.2.2.1.3.5. 多様不二論者：多様にして不二なる単一なものが直接知覚に顕現する。
 - 1.2.2.2.1.3.6. 単一性は多様性と相反する。
 - 1.2.2.2.1.3.7. 多様不二論者：単一の識は多様な形象と運命を共にする。
 - 1.2.2.2.1.3.8. 運命を共にするならば、単一の識と多様な形象とには差異は顕現しない。知不二論は成立しない。

1.2.2. Entity as *jñānarūpa*: the examination of Yogācāra's *ākāravāda*.

1.2.2.1. Yogācāra: *advaya-jñāna* (nondual cognition) is one, and *ākāras* appear there.

(W 626.7–14; V 459.10–15; T 374.16–24; D 229a3–6; P 281b6–282a3)⁴

atha ⁵ saṃvedanabalād viṣayasthiter, ananubhūyamānatvenārthasyātyantaparoḥṣatvāt, samanantarapratyayabalena pratiniyatasya kāryasyodayāt tadvyatirekeṇa ⁶ kalpayitum aśakyatvāc ca svataḥsiddharūpam⁷ evādvayaṃ jñānam⁸ ekasvabhāvaṃ paramārthato grāhyagrāhakabhāvarahitam, ahetukatve⁹ nityaṃ sattvādiprasaṅgāt, nityatve¹⁰ 'rthakriyādyanupapattē ca svahetupratibaddhodayam udayānantarāpavargi¹¹, kevalam anādhivabhāvibhāvābhiniveśavāsanāparipākāprabhāvā¹² ākārās tatra¹³ pratibhāsanta iti jñānātmano bhāvo yogācāir abhyupagamyate.

⁴ MAV 120.3–122.3: rang gi sde pa sems tsam gyi tshul la brten pa blo gros dkar ba gang dag mam par shes pa ni mthun pa'i bag chags yongs su smin pa la rag las nas 'byung ste / byung ma thag tu 'jug pa dang don du tshor bar bya ba dang tshor ba po'i mam pa med do zhes smra ba de dag gi lugs la dogs pa bsu ste / ci ste thog ma med rgyud kyī // bag chags smin pas sprul pa yi // mam pa dag ni snang ba yang // nor bas sgyu ma'i rang bzhin 'dra // (k. 44)

(1) gzugs la sogs pa'i skye mched kyī rdul phra rab mams dang rdzas dang yon tan la sogs pa mchog dang mchog ma yin pa'i lta ba'i rjes su 'brang ba mams kyis brjod pa dag mi rigs pa dang (2) tshor bar bya ba dang tshor ba po'i mtshan nyid dang yang bral ba'i phyir dri za'i grong khyer dang / mgal me'i 'khor lo dang / sprul pa dang / rmi lam dang / sgyu ma dang / chu zla lta bu kho na ste /

dmigs pa bden par 'dod pa'i shes pa la snang ba'i mam pa 'di dag kyang thog ma med pa'i srid par 'byung ba can dngos po la mngon par zhen pa'i bag chags yongs su smin pa'i mthus snang ngo //

MAP 123.14–21: 'di dag de ltar snang ba'i rgyu gang yin snyam pa la thog ma med par srid pa 'byung ba can zhes bya ba la sogs pa smos so // dngos po la mngon par zhen pa 'di la thog ma med pa'i srid par 'byung ba'i ngang tshul yod pas de skad ces bya ste / mngon par zhen pa des bskyed pa'i bag chags gang yin pa'o // bag chags de yongs su smin pa ni 'jug pa thob pa nyid do // bag chags yongs su smin pa de'i mthu ni nus pa ste / bdag po zhes bya ba'i tha tshig go // mthu de las mam pa 'di dag snang ste / phyi rol gyi don med par yang zhes bya ba'i tha tshig go //

⁵ atha] W V T, artha MsC.

⁶ °dayāt tadvyatirekeṇa] W V, °dayād vyatirekeṇa MsC, °dayātdvyatirekeṇa T.

⁷ svataḥsiddharūpam] V T, svataḥ siddharūpam W.

⁸ °dvayaṃ jñānam] W V, °dvaya-jñānam MsP T.

⁹ ahetukatve] W V T, ahetutve MsC.

¹⁰ °prasaṅgāt, nityatve] V, °prasaṅganityatve MsC, °prasaṅgān, nityatve W T.

¹¹ °nantarāpavargi] W V T, °nantarāyavargi MsP, °nantarāvargi MsC.

¹² anādhivabhāvibhāvā°] W V, anādhivabhāvī bhāvā° T.

¹³ tatra] W V T, tatra na MsC.

1.2.2. 能知の存在—瑜伽行派の形象論の吟味

1.2.2.1. 瑜伽行派：不二知 (advaya-jñāna) は一であり、諸形象がそこに顕現する。

あるいはまた、(1) 認識に基づいて対象が確定されるから、(2) [外界] 対象は、直接経験されていないので、究極的に知覚不可能なものであるから、(3) それぞれに限定された結果 (= 認識) が等無間縁によって生じるので、それ (等無間縁) なしに [結果 (= 認識) を¹⁴] 構想することができないから、不二知は (advaya-jñānam), それ自体で成立するものに他ならず、勝義としては所知・能知関係を離れた一なる自性 (ekasvabhāva) を有するものである。

[不二知が、] もしも無因のものであるならば、常に存在性などが付随するから、また、もしも常住であるならば、効果的作用などがありえないから、[不二知は] 生起が自身の原因によって制限されているものであり、生起の直後に消滅するものである。ただ、無始より有として生じる (= 輪廻している) 存在に対する執着の習気 (abhiniveśavāsanā) ¹⁵が成熟することによって、諸形象がその [不二知] に顕現すると [考えて]、瑜伽行派は、存在は知を自体とすると認める

¹⁶.

¹⁴ 文法的には、kāryasya が āśakyatvāt に係るのが自然であり、構想される対象は「結果 (= 認識)」が妥当であろうが、「外界対象」も構想される対象として考えられよう。

¹⁵ TrBh(L) 19.5–9: yasmād ālayavijñānam dvidhā pravartate. adhyātman upādānavijñaptiḥ bahirdhā 'paricchinākarabhājanavijñaptiś ca, tatrādhyātman upādānam parikalpitasvabhāvābhiniveśavāsanā sādhiṣṭhānam indriyarūpaṃ nāma ca, asyāmbanasyātisūksmatvāt.

¹⁶ MAV 120.3–122.3, 一郷 [1985: 143.22–144.14]: 「[すべては] 心にすぎない」という理論にもとづく、智慧明晰な我が [瑜伽行] 派は、「知識は、同類の習気 (vāsanā) の成熟によって生じ、生ずるや否や滅するものである。また、[知識は] 対象として知覚されるべきもの・知覚の主体という形象をもつものではない」と語るが、かれらの見解に疑問を提示する。[まず、かれらの見解を紹介しよう]。

無始爾来の [有情の] 心流 (saṃtāna) の習気の成熟によって、幻影 (nirmāṇa) の形象が、顕現する。しかし [それは] 迷乱によ [つてもたらされたものであ] るから、幻を自性とするようなものである。 (k. 44)

(1) すぐれた考えにしたがった人々 (ヴァイパーシカ) の語る色等の処 (āyatana) の極微や、そうでない人々 (ヴァイシェシカ) の語る実体、属性等 [の所取がないから能取の知識] はありえない。また、(2) [もし外境があつたとしても、知識は] 知覚の対象・知覚の主体という相をやはり欠くから、[これらの存在は] ガンダルヴァ城、旋火輪、幻化、夢、幻、水月の如く、[顕現する] にすぎない。

[これらの存在がそのように顕現する根拠はなにか、といえ] ば 認識対象の実有を主張する人の知識に顕現するこれらの形象さえも、無始爾来、生存状態にあるものに対する執着の習気が成熟することによって [外境がなくても] 顕現するのである。

1.2.2.2. Are *ākāras* real or unreal?

(W 626.15–16; V 459.15–16; T 374.24–375.1; D 229a6; P 282a3–4)¹⁷

tatrāpi kiṃ ta¹⁸ ākārās tāttvikā eva, kiṃ vā pratibimbādivad¹⁹ avicāraikaramyā iti vikalpaḥ.

¹⁷ MAV 124.3–128.5:

de dge 'on kyang de dag gi // dngos de yang dag nyid dam ci //

'on te ma brtags gcig pu na // dga' bar khas len 'di bsam mo // (k. 45)

lugs 'di ni tshad ma dang lung shin tu gsal bas shes par bya ba dang / dmigs pa can mtha' yas pa dag gi mngon par zhen pa ngan
pa'i gnyen po yang yin pas shin tu dkar ba ste //

'di ltar rdul phra rab la sogs pa yod pa dag dgag par byed pa dang tshor bar bya ba dang tshor ba po'i mtshan nyid dang 'gal ba yang
ston pa sngar bshad pa'i tshad ma ni tshul 'di rab tu gsal bar byed pa'o //

tshul 'di ni lung dang ldan pa yang yin te / *lang kar gshegs pa'i mdo* las

(1) thog ma med pa'i blos bsgos pa // sems ni gzugs brnyan lta bu ste //

don gyi mam par snang yang ni // yang dag ji bzhin mthong don med //

(LAS VI.2, X.708: bimbavad dr̥syate cittam anādimatibhāvitam / arthākāro na cārtho 'sti yathābhūtaṃ vipaśyataḥ //)

(2) gang zag rgyun dang phung po dang // rkyen dang de bzhin rdul mams dang //

gtso bo dbang phyug byed pa dag // sems tsam po las mam par brtags //

(LAS II.137, X.133: pudgalāḥ saṃtatiḥ skandhāḥ pratyayā hy aṇavas tathā / pradhānam īśvaraḥ kartā cittamātre vikalpyate //)

(3) don yod ma yin sems nyid de // phyi rol don mthong log pa yin //

rigs pas mam par bltas na ni // gzung dang 'dzin pa 'gag par 'gyur //

(LAS X.153cd–154ab: bāhyārthadarśanaṃ mithyā nāsty arthaṃ cittam eva tu / yuktyā vipaśyamānānāṃ grāhagrāhyaṃ nirudhyate //)

zhes gsungs so //

mkhas pa dag tshul 'di la brten nas bdag dang bdag gi dang gzung ba dang 'dzin pa rab tu dbye ba dang bcas pa mams la phyin ci
log tu gyur pa mams sel to //

'on kyang 'di la dpyad par bya ba cung zad tsam 'di yod de / ci mam pa de dag de kho na nyid yin nam 'on te ci gzugs brnyan la
sogs pa ltar ma brtags pa gcig pu na dga' ba zhig yin / 'dis cir 'gyur /

MAP 129.8–9: 'on kyang zhes bya ba la sogs pas ni tshigs su bcad pa'i cha lhag ma 'grel par byed de /

¹⁸ ta] W, tv MsC T, te V.

¹⁹ pratibimbādivad] MsC V T, pratibimbakādivad W.

1.2.2.2. 諸形象は真実か虚偽か.

それ(諸形象が不二知に顕現するという瑜伽行派の見解)についても、それら形象は、真実なものに他ならないのか、あるいは、影像等の如く、考察されない限りは好ましいもの(=世俗的なもの)なのかという選択肢がある²⁰.

²⁰ MAV 124.3–128.5, 一郷 [1985: 144.16–145.13]:

こ[の見解]はすぐれているが、それら[青等の形象]の本性、それは、実有なものであるか、あるいは、厳密な検討がくわえられない限り好ましく承認されるべきものか、とこの是認すべき[見解]を吟味しよう。(k. 45)

この見解は、非常に明瞭な論理と聖教によって理解されるべきものであり、また、果てしない有外境論者たちの[果てしなく]悪い執着を対治するものであるから、たいへん明晰なものである。

すなわち、[非遍在者である]極微等の存在を否定し、かつ[遍在者であるアートマンや虚空等が]知覚の対象・知覚の主体という相と矛盾するものであることをも示す、以前に述べた論理が、ここの理論を明示している。この理論[の正しさ]は、聖教によっても証明されるのであって、『入楞伽經』に次のように説かれている。

(1) 無始爾來の考えがしみついている心は、影像の如く、対象の形象をもつとみられている。しかし、正しく観察するひとにとっては、対象は存在しない。(LAS VI.2, X.708)

(2) ブドガラ、心流、蘊、[因]縁、極微、根本原因、造物主たるイーシュバラなどは、ただ心の中で想像されたものである。(LAS II.137, X.133)

(3) 外境を見るということは、まちがっている。対象はなく、心だけがある。論理的に観察している人々には所取・能取は否定される。(LAS X.153cd–154ab)

賢者たち(瑜伽行派)は、この理論にもとづいて、我・我所、所取・能取という区別をもち、倒錯した[考えをもつ]人々を否定する。

しかし、この[見解]について少しばかり吟味せねばならぬことがある。それらの形象は、実有なものであるか、あるいは、影像等の如く厳密な検討がくわえられない限り好ましく承認されるべきものであるのか、これについてはどうであろうか。

1.2.2.2.1. Criticism of Yogācāra's *satyākāravāda*.

1.2.2.2.1.1. Because *ākāra* is multiple, cognition is multiple, and *advayaājñānavāda* (nondual cognition theory) is denied.

(W 626.17–627.1; V 459.16–23; T 375.1–12; D 229a6–229b3; P 282a4–282b1)²¹

yady ādyas tadā tāttvikānekākāravyatirekā²² ākārasvarūpavad anekatvaṃ²³ vijñānasyāsajyata ity ekatā kutaḥ. atha sakṛdanubhūyamānatvena vijñānasyaikatvaṃ niścitam, tadaika²⁴ -jñānāvyatirekā²⁵ ākārāṇām ekatvaṃ vijñāna²⁵-svarūpavad²⁶ durnivāram²⁷.

bhavatv evam iti cet.

naivam. tathā hi yady eka ākāś²⁸ calanātva²⁹diviṣṭaḥ²⁹ pratibhāsate tadā pariśiṣṭā apy ākārāḥ pūrvākāravyatiricyamānamūrtisvabhāvatvāt tathāvidhā eva syur iti vaicitryākārānubhavo virudhyate.

ato nānātvam aikāntikam evākārāṇām ity ekānekatvayoḥ³⁰ parasparaviruddhadharmādhyāsa³¹ -yogāt pāramārthikam evākāravijñānāyor nānātvam sthitam ity abhyupagatādvaya³² -nayahāniḥ.

²¹ MAV 128.10–19:

gal te yang dag mam par shes // du mar 'gyur ro yang na ni //

de dag gcig 'gyur 'gal ldan pas // gdon mi za bar so sor 'gyur // (k. 46)

yang dag pa'i mam pa dang tha dad pa ma yin pas mam pa'i rang gi ngo bo bzhin du mam par shes pa du mar 'gyur ba'am yang na mam par shes pa gcig pu dang tha mi dad pas mam pa mams kyang mam par shes pa'i rang gi ngo bo bzhin du gcig pu nyid du 'gyur ba bzlog par dka'o // 'gal ba'i chos gnas pa nyid pas don dam par na mam pa dang mam par shes pa nyid tha dad nyid du 'gyur ro //

MAP 129.10–12: yang dag pa nyid yin na mam pa dang mam par shes pa gnyis snga ma bzhin du rang bzhin phan tshun gnas par thal bar 'gyur te // khong du chud par sla ba nyid do //

MAV 130.1–11:

nges pa gzhan yang brjod pa /

mam pa tha dad ma yin na // g-yo dang mi g-yo la sogs pa //

gcig gis thams cad g-yo la sogs // thal bar 'gyur te lan gdab dka' // (k. 47)

tha dad pa ma yin zhes bya ba ni de nyid yin no zhes bstan par 'gyur ro // de bas na gal te mam pa gcig g-yo ba la sogs pa'i byed pa zin tam / ser po la sogs pa'i bdag nyid du gyur na lhag ma mams kyang mam pa de lta bur 'gyur ro // de lta ma yin na gdon mi za bar sna tshogs nyid du 'gyur ro //

thal ba 'di ni phyi rol gyi don gyi phyogs la yang mam pa dang bcas pa'i shes pa khas len na mtshungs pa rab tu ston te /

MAP 131.3–6: de lta ma yin na zhes bya ba ni g-yo ba la sogs par snang ba ngo bo gcig pa kho na ma yin na zhes bya ba'i tha tshig go // thal ba 'di ni zhes bya ba ni g-yo ba la sogs pa mam pa gcig tu snang bar thal bar 'gyur ba'o //

²² tāttvikānekākāravyatirekā²²] W V, bhāvikānekākāravyatirekā²² MsP T, bhāvikāraikākāravyatirekā²² MsC, yang dag pa'i mam pa du ma Tib..

²³ anekatvaṃ] V T, anekaitva MsP, anekaitvaṃ W.

²⁴ tadaika²⁴] W V T, tadaiva²⁴ MsP, gcig Tib..

²⁵ vijñāna²⁵] W V T, vijñānam MsC.

²⁶ svarūpavad] W V T, svarūpava MsP, svarūpa MsC, svarūpada²⁶ MsA, ngo bo dang 'dra bar Tib..

²⁷ durnivāram] W T, durnivāram V.

²⁸ ākāś²⁸] W V T, ākarakāś MsC.

²⁹ calanātva²⁹] W V, calanādi²⁹ T.

³⁰ ekānekatvayoḥ] W V T, ekānekasya citratvānabhyupagamamārgayathoktatvayos MsC.

³¹ °dharmādhyāsa³¹] W V T, °dharmābhyādhyāsa³¹ MsP, chos gnas pa Tib..

³² abhyupagatādvaya³²] W V T, abhyupagatānādvaya MsC.

1.2.2.2.1. 瑜伽行派の形象真実論批判

1.2.2.2.1.1. 形象が多であるから、識も多であり、知不二論は否定される。

もし最初〔の選択肢〕(形象が真実なもの)ならば、その場合、〔識は〕真実である多くの形象と区別されないから、形象そのものと同様に、識は多となってしまうので、どうして〔識は〕一であろうか。また、〔識と形象とが〕同時に直接経験されることによって、識が一であることが決定されるならば、その場合、〔形象は〕一つの知と区別されないから、識そのものと同様に、諸形象が一であることは避け難い。³³

【形象真実論者】それでいいだろう。

【立論者】そのようなことはない。なぜなら、もし一つの形象が動性等によって限定されたものとして顕現するならば、その場合、残りの諸形象も先の形象と現に区別されない形態を自性とするものであるから、同種のもの(=動性等によって限定されたもの)になってしまう。それ故、多様な形象の直接経験と矛盾している。

この故に、諸形象は必ず多数であるから、一性と多性とは、相互に矛盾する〔二つの〕属性が〔それぞれの基体に〕存立すること(parasparaviruddhadharmādhyāsa, =差異)³⁴と結びつくので、〔一つのものに両方の属性はありえない。それ故、〕形象と識とはまさに勝義的に多数であると確定される。従って、〔形象真実論者が〕承認している〔形象と識との〕不二論は否定される³⁵。

³³ 森山 [1992: 102–103]では、この形象と識との対応が、3 種類の形象真実論としてまとめられている。すなわち、ここで述べられているように、まず形象と識との対応関係が<多:多>の関係が示され、次に形象と識との対応関係が<一:一>の関係が提示される。そして、後に議論される、形象と識との対応関係が<多:一>の関係である多様不二論との3種類となる。

³⁴ parasparaviruddhadharmādhyāsa については、江崎 [2005]を参照。

³⁵ MAV 128.10–19, 一郷 [1985: 145.16–22]:

もし〔形象が〕実有なものであれば、知識が多となるか、または、それら(形象)が一となる。〔両者は〕矛盾した〔属性〕を伴うから、まちがいに別のものになるであろう。(k. 46)

実有な形象と異なるものではないから、形象の本性の如く知識は多となるか、あるいはまた、一なる知識と異なるものではないから、諸の形象も知識の本性の如く一性となることをまぬがれえない。〔とすれば〕矛盾した属性がおかれることになるから、勝義として、形象と知識とは別なものとなる。

MAV 130.1–11, 一郷 [1985: 145.23–146.6]:

さらにまた、別の誤謬がある。

形象が種々でない(一)ならば、動・不動等〔の形象〕の一つ〔か動であること〕によって、すべてが動等〔の形象〕になってしまうことを妨ぐことはむずかしい。(k. 47)

〔a 句の〕「種々でない」とは、「同一」ということである。それゆえ、もし一つの形象が動等の作用をなすか、黄色等を自体とするものであるならば、余〔の形象〕も同様なものとなるであろう。そうでなければ、〔形象は〕まちがいに多様なものとなる。このように(すべてが)〔動等の一つの形象として顕現するように〕になってしまう誤謬は、外界実在論(bahirarthapakṣa)の中の有形象の知識(sākāravijñāna)を認める〔理論の〕場合も同じであることを示す。

Cf. MA kk. 22–23, MAV 80.20–84.1, 一郷 [1985: 133.21–134.17].

1.2.2.2.1.2. Criticism of Yogācāra theory of simultaneous occurrence of many homogeneous cognitions.

1.2.2.2.1.2.1. Śākyabuddhi: many homogeneous cognitions occur simultaneously.

(W 627.2–5; V 459.23–26; T 375.12–15; D 229b3–4; P 282b1–3)

atha sukhādivan nīlādaya ākāra anubhavātmakā evety ekasya citratvānabhyupagamān na
yathoktadūṣaṇaprasaṅga iti matvā samānajāṭīyāny api vijñānāni bahūni vijāṭīyajñānavat sakṛd utpādyanta iti
varṇyate, tadāyam anyo doṣaḥ.

1.2.2.2.1.2. 瑜伽行派の同種多識俱起説批判

1.2.2.2.1.2.1. シャーキャブッディ：同種の多数の識が同時に生じる。

もし、楽などのように、青などの諸形象は直接経験を自体とするものに他ならないため、一つのものに多様性は認められないから、すでに述べたような誤謬となってしまうことはない、と考へて、同種類の多くの識も、異種類の知と同様に、同時に生起する³⁶、と〔ある唯識派（シャーキャブッディ）によって³⁷〕説明されるならば、その場合、次のような別の過失がある。

³⁶ 六識俱起については、沖 [1973]、船山 [2000]、佐藤 [2015]を参照。

³⁷ MAV 132.4–7, 一郷 [1985: 146.15–18]:

gang dag bde ba la sogs pa ltar sngon po la sogs pa'i mam pa mams kyang myong ba'i bdag nyid kho na ste / shes pa de dag ni mang la de dag kyang rigs 'thun pa sha stag ste / rigs mi mthun pa'i shes pa bzhin du 'byung ngo zhes smra ba de dag gi ni

「楽 (sukha) などと同様、青色などの形象も領納を自体とするもの (anubhavātmaka) にほかならない。そして、それらの知識は多であり、かつ同種類のものばかり、〔同時に〕異種類の知識のように生じている」と語る〔瑜伽行派の或る〕人々の見解は、

MAP 133.1: gang dag ces bya ba ni mal 'byor spyod pa kha cig kho na yin te /

岩田 [1981: 156]は、この MAP 中の「ある瑜伽行派」をシャーキャブッディに同定している。

1.2.2.2.1.2.2. The application of criticism of atomic theories.

(W627.5–28; V 459.26–460.9; T 375.16–376.15; D 229b4–230a5; P 282b3–283a7)

tathā hi yat tan madhyābhimataṃ vijñānaṃ parivṛtānuprakhyam iṣyate tad yena svabhāvenaikasyābhimukhyaṃ pratipadyate kiṃ tenaivānyasyāpi, athānyeneti vikalpaḥ.

tenaiveti pakṣe parivāryāvasthānābhāvenāvaśiṣṭānām³⁸ na³⁹ digantarāvasthitir yathārthā bhavet. ataś ca pūrvāparādidigbhāgenānutpatter nīlādimaṇḍalasamniveśapratibhāso na syāt.

anyeneti tu⁴⁰ pakṣe svabhāvabhedalakṣaṇatvād vastubhedasyety ekatā kuta iti paramāṇuvicārabhāvī doṣaḥ samāpatati.⁴¹

³⁸ °śiṣṭānām] W V T, °śiṣṭānāndi MsA.

³⁹ na] W V T, om. MsC.

⁴⁰ tu] W T, om. V.

⁴¹ MAV 136.2–140.6: de bas na mam par smin pa'i mam par shes pa lus dang longs spyod dang gnas su snang ba'i mam pa tha dad pas tha dad par thal bar 'gyur gyi gnod pa ni ci yang mi skyed do // ci lugs 'di mma med pa yin nam zhe na / ma yin par brjod pa /

ci ste mam pa'i grangs bzhin du // mam par shes pa khas len na //

de tshe rdul phran 'drar 'gyur ba // dpyad pa 'di las bzlog par dka' // (k. 49)

gal te bar med par gnas pa'i rdul phra rab kyi ngo bo mams ltar rigs mthun pa'i mam par shes pa mang po 'di dag kyang 'byung na / de'i tshe rdul phra rab la dpyad pa ci 'dra ba sngar byas pa de 'dra ba nyid mam par shes pa mams la yang bzlog par dka' bar 'gyur te /

'di ltar dbus su 'dod pa'i mam par shes pa rdul gyis bskor ba lta bur 'dod pa gang yin pa de'i rang bzhin gang gis gcig la mngon du phyogs pa de nyid kyi ci gzhan la yang phyogs sam 'on te gzhan gyi phyogs zhes mam par rtog pa'i nyes pa de nyid do // bar chad med par rigs gcig pa'i rdul du ma 'dzin pa na rags pa gong bu gcig tu 'khrul pa dang bar chad med par du ma myong ba'i bdag nyid sngon po la sogs pa rig pa la gcig tu 'khrul zhes bya ba 'di la bye brag ci yod de / sngon po la sogs pa bar med par snang ba de nyid kha cig ni rdul phra rab kyi bdag nyid du khas len / gzhan ni rig pa'i ngo bo zhes zer ba skyon mtshungs pa nyid las mi 'da'o //

1.2.2.2.1.2.2. 極微論批判の適用

すなわち、[複数の識の] 中心にあると考えられているその識を [諸極微に] 囲まれている [極微] のようなものと認める時、そ [の識] はある自性でもって [周囲にある] 一つ [の識] と向き合っていることになる。[その場合、] 同じそ [の自性] でもって他 [の識] と [向き合っている] のか、あるいは別 [の自性] でもって [他の識と向き合っている] のかという選択肢がある。

[中心の識が、一つの識と向き合っている場合と] 同じそ [の自性] でもって [他の識とも向き合っている] という立場では、[複数の識が中心の識を] 包囲して位置することがないので、残りの [包囲する複数の識] が他の方角に位置づけられることが客観的にはないことになってしまふ。また、この故に、東や西などの方角の区分をともなう [残りの包囲する複数の識が] 生じることがないから、青などが円状に顕現することはないだろう。

一方、[中心の識が] 別 [の自性] でもって [他の識と向き合っている] という立場では、「事物の相違は自性の相違に特徴づけられるから⁴²、どうして [識が] 単一なものとなるだろうか⁴³」という、極微の吟味において生じた過失が降りかかってくる⁴⁴。

⁴² ここで、Skt. では iti を補っているが、Tib. 訳に従った。

D 299b6, P 282b6–7: dngos po'i dbye ba ni rang bzhin gyi dbye ba'i mtshan nyid can nyid yin pa'i phyir gcig pa nyid ga la yod

⁴³ 現観莊嚴論光明研究会 [2019: 133–134].

⁴⁴ MAV 136.2–140.6, 一郷 [1985: 147.16–148.9]: 「そうであれば、身・所受用・処として顕現する異熟識（アーラヤ識）の形象は多様であるから、[知識は] 多様なものとなり、[形象と知識との間に] 対立をなんらひきおこさない。それでは、この [反論者の] 見解は無傷であろうか」というならば、[無傷では] ないことを [次に] 説く。形象にふくまれる多様性が知識そのものにもあると君が主張するならば、極微に関しておこなわれたと同様の批判を、これ（知識）においてもさけることはむずかしい。(k. 49)

もしこれら同種の多くの知識も、間隙なく位置する極微の本性のように存在するならば、その場合、極微に関して以前なされたと同様の吟味が、知識についても [なされることを] さけることはできない。すなわち、極微にかこまれた [極微の] ようだと言われ、中央 [に存在する] と言われる知識は、その全体をもつて一つ [の知識] と向かいあっているのであるが、その同じ全体をもつて、第三の知識と向かいあっているのか、あるいは、自己の一部で [第三の知識と] 向かいあうことになるのか、という選言支をもつ誤謬は、[極微の場合も知識の場合も] 同じである。

間隙なく [存在する] 同種類の多くの極微が認識されるとき [それら極微の] 粗大な塊を「一」であると見あやまること、間隙なく [存在する] 多くの、領納を自体とする青等の知識を「一」であると思いあやまることには、一体、相違があるであろうか。間隙なく [存在し] 顕現している青等を、或る人は極微を自体とするものだと認め、他の人は知識を本性とする、というが、誤謬が同じであることはまぬがれない。

nanv amūrtatvāj jñānānām⁴⁵ na deśakṛtaṃ paurvāparyam asti. tat katham aṇuvan madhyavartitvaṃ jñānānām bhavet.

satyam etat. ayam aparo 'sya doṣo 'stu⁴⁶ yad deśavitānapratibhāsinām ākārānām satyatvam icchatā⁴⁷ jñānānām adeśānām⁴⁸ api satām bahūnām tathā deśa⁴⁹-vitānotpādaḥ⁵⁰ parikalpyate. anyathā hi yady anekavijñānotpādakalpanāyām api tathā deśa⁵¹ -vitānotpādapratibhāso⁵² mithyā syāt tadānekavijñānotpādakalpanā vyārthaiva⁵³ syāt. na ca deśavitānāvasthitanīlādipratibhāsam antareṇānyan nīlādy anubhūyate yat satyaṃ bhavet. tasya cālīkatve kim anyat satyaṃ bhaviṣyafīti yatkiṃcid etat.

nanu tathāpy aṇavo⁵⁴ mūrtā vijñānaṃ tv amūrtam⁵⁵, tat katham sa evātra doṣa iti cet.

naiṣa doṣaḥ. tathā hi tad eva nīlādi⁵⁶ nairantaryeṇa bhāsamānam ekena paramāṇvātmakam abhyupagamyate⁵⁷, apareṇa samvidrūpaṃ iti nāmamātram eva kevalaṃ bhidyate, na tu deśanairantaryāvasthānalakṣaṇasyārthasya bhedaḥ. na ca nāmamātrapravṛttidvārakṛtaṃ tulyadoṣatāpādanam kriyate, api tu deśanairantaryāvasthānakṛtaṃ. tac ca nāmamātrabhede 'py astīti katham tulyadoṣatā na bhavet.⁵⁸

⁴⁵ jñānānām] V T, jñānān W.

⁴⁶ 'stu] W V T, om. MsC.

⁴⁷ icchatā] W V T, icchato MsC.

⁴⁸ adeśānām] W V T, uddeśānām MsC MsP.

⁴⁹ tathā deśa°] V T, tathādeśa° W.

⁵⁰ °vitānotpādaḥ] W, °vitānāvasthānenotpādaḥ MsC MsP, °vitānāsthānenotpādaḥ V T.

⁵¹ tathā deśa°] V T, tathādeśa° W.

⁵² °vitānotpādapratibhāso] V T, °vitānotpadapratibhāso W.

⁵³ °kalpanā vyārthaiva] W V T, °kalpanā vyārtheva MsC, °kalpanārthaiva MsP.

⁵⁴ aṇavo] W T V, anuvo MsC.

⁵⁵ vijñānaṃ tv amūrtam] W MsP V T, vijñānatvam mūrta MsC.

⁵⁶ nīlādi] W T V, nīlādin MsC.

⁵⁷ abhyupagamyate] W, upagamyate T V.

⁵⁸ MAP 139.1–141.8 : dpyad pa de gang yin snyam pa la / 'di ltar dbus su 'dod pa'i mnam par shes pa zhes bya ba la sogs pa smos so // shes pa mams ni lus can ma yin pa'i phyir yul gyis byas pa'i snga ma dang phyi ma med pa ma yin nam / de ji ltar na shes pa mams rdul phra mo bzhin du dbus na gnas par 'gyur / de ni bden pa smra ba 'di la skyon gzhan mam pa yul khebs par snang ba mams bden pa nyid du 'dod pas shes pa mang po yul med pa yin yang de bzhin du yul khebs par gnas par skye bar yongs su rtog pa gang yin pa 'di yo do // de lta ma yin te gal te mam par shes pa du ma skye bar rtog pa la yang de ltar yul khebs par skye bar snang ba log pa yin par gyur na de'i tshe mam par shes pa du ma skye bar rtog pa don med par 'gyur te / sngon po la sogs par snang ba yul khebs par gnas pa ma gtogs par ni gang zhig bden par 'gyur ba sngon po la sogs pa gzhan nyams su myong ba ni med do // sngon pa la sogs par snang ba yang brdzun pa nyid yin na gzhan ci zhig bden par 'gyur te / 'di ni gyi na'o // rdul phra rab mams ni lus can yin la mam par shes pa ni lus can ma yin pa ma yin nam / de ji ltar na 'dir nyes pa 'di nyid du 'gyur snyam pa la / bar chad med par rigs gcig pa'i rdul du ma 'dzin pa na zhes bya ba la sogs pa smos te / bsdus pa'i don ni ming tsam tha dad pa 'ba' zhig tu zad kyi / yul 'dab chags par gnas pa'i mtshan nyid kyi don la ni tha dad pa med de // ming tsam la 'jug pa'i sgos byas pa'i nyes pa mtshungs par sgrub pa ni ma yin gyi / yul 'dab chags par gnas pas byas pa'i nyes pa mtshungs par byed pa de la yang ming tha dad pa yod kyang ji ltar nyes pa mtshungs par mi 'gyur zhes bya ba yin no //

【形象真実論者】諸知は形のあるものではないから、空間的な東西関係が存在しない。従って、どうして「同時に生じている」諸知「の一つ」が、「極」微のように中心に存在することがあるのか。

【立論者】それはそうである。「しかし」この「反論」には以下のような別の過失があるはずである。すなわち、空間的に拡がって顕現する諸形象が真実であると認める者は、多数の諸知が、非空間的なものであるにも関わらず、「青などと」同様に空間的に拡がって「同時に」生じると想定している。実に、そうでなければ、「すなわち」もしも多くの識が生じると考えているにも関わらず、「それらが青などと」同様に空間的に拡がって生じる顕現が誤りである「と認める」ならば、その場合、多くの識が生じるという想定が全く無意味となってしまう。しかし、空間的に拡がって存立する青などの顕現を除いて他に、真実であるはずの青などは直接経験されない。そして、その「空間に拡がって存立する青など」が虚偽であれば、他の何が真実となるであろうか。以上のこの「議論は」取るに足らないものである。

【形象真実論者】そうであっても、諸「極」微は形のあるものであるが、識は形のないものではないか。よって、どうしてこの場合に同じ誤謬があるのか。

【立論者】そのような誤謬はない。すなわち、その同じ青などは、間隙を伴わずに顕現しているが、「それを」ある者は極微を自体とするものであると認め、別の者は知覚を本質とするものであると「認めている。しかし、それについては」ただ単に名前のみが区別されているに過ぎず、空間的に間隙を伴わずに存立することを特徴とする内容に区別はない。そして、単に名前をみの適用という仕方によって同じ誤謬がもたらされるのではなくて、空間的に間隙を伴わずに存立することによって「同じ誤謬がもたらされるの」であって、それ（同じ誤謬がもたらされること）は、単に名前に区別がある場合にもある。それゆえ、どうして同じ誤謬がないことがあろうか。

1.2.2.2.1.2.3. If many cognitions occur simultaneously, conceptual cognitions don't occur successively.

(W 627.28–628.6; V 460.10–14; T 376.16–23; D 230a5–b1; P 283a7–b2)

athaivam api jñānajñeyayor vaisādṛśyāj jñeyagataṃ dūṣaṇaṃ jñāne nānumanyate⁵⁹. tadāpy⁶⁰ ucyate, yugapadanekajñānodaye⁶¹ ghaṭapaṭādiviśayaḥ pratīyamāno vikalpaḥ kramabhāvī na syāt. na caitac chakyate vaktum, nirvikalpakajñānāny eva yugapad iti tadanubhavanīścayadvāreṇa vikalpānām utpatteḥ. tataś ca na hīmāḥ⁶² kalpanāḥ svayam asaṃviditarūpā utpadyanta iti sakṛdanubhavanīścayaprasaṅgāt kramabhāvī vikalpo 'nubhūyamāno na syād iti pratyakṣavirodhaḥ.

⁵⁹ jñāne nānumanyate 一郷 [2015: 91, fn.15] (Cf. shes pa la yod par khas mi len Tib.): jñānenānumanyate W V T.

⁶⁰ tadā°] W V T, tathā° MsP.

⁶¹ yugapadanekajñānodaye] V T, yugapadanekajñānopadaye MsC, yugapad anekajñānodaye W.

⁶² na hīmāḥ] V T, hīmāḥ W.

1.2.2.2.1.2.3. 同時に多数の識が生じるならば、分別知は継起しない。

【形象真実論者】 そうであっても、所知と能知とは異なるものであるから、所知に存する誤謬は、能知においては承認されない。

【立論者】 その場合も [次のように] 述べる。同時に多くの知が生じるならば、壺と布などを対象とすると理解されている分別が順次に生じるものではなくなってしまうだろう。そして「他ならぬ諸無分別知が[諸分別知と]同時に[生じる]⁶³」と述べることは出来ない。何故ならば、その直接経験の決定によって諸分別が生じるからである。そしてそれ故、実に、これら諸分別は、自ら知覚されないものとして、生じることはない。従って、同時に直接経験の決定が付随することになるから、分別が順次に生じるのを現に経験することはないはずである。したがって、[諸分別が同時に生じることは] 直接知覚と矛盾する。

⁶³ Cf. PV III 133: manasor yugapadvṛtṭeḥ savikalpāvikalpayoḥ / vimūḍho laghuvṛtṭer vā tayor aikyaṃ vyavasyati // (船山 [2000: 321–322]: 分別知 (意識) と無分別知 (感官知) は同時に生じるか故に【1】、あるいは、すばやく生じるか故に【2】、愚かな者は「誤って」両者を同じものと判断する)。【1】は自説、【2】は対論者説。Cf. 戸崎 [1979: 213f.]

1.2.2.2.1.3. Criticism of Yogācāra's *citrādvaitavāda*.

1.2.2.2.1.3.1. Citrādvaitavādin: cognition appearing variously is one like agate.

(W 628.7–8; V 460.14–15; T 376.23–24; D 230b1; P 283b2–3) ⁶⁴

atha matam. ekam eva vijñānam āgrhītacitrarūpaṃ⁶⁵ mecakamaṇipratibhāsavad iti.

⁶⁴ MAV 140.11–142.13: gang dag nor bu gzi bzhin du mam par shes pa gcig kho nas sna tshogs kyi ngo bo blangs so zhes bya ba de dag gi lugs la dogs pa brjod pa / gal te sna tshogs de gcig na // nam mkha'i gos can lugs sam ci // (k. 50ab) 'di ni nam mkha'i gos can 'chang ba'i lta ba / du ma'i ngo bo dngos po la // brjod par 'dod pas ngo bor 'dod // cig ca'am rim gyis tshul gnyis las // tshig gi bya ba gzhan med do // (TS 1746: vastuno 'nekarūpasya rūpaṃ iṣṭaṃ vivakṣayā / yugapatkramavṛttibhyāṃ nānyo 'sti vacasāṃ vidhiḥ //) zhes bya ba de la brten tam de lta'o zhes na / de yang rigs pa ma yin te // sna tshogs gcig pa'i rang bzhin min // rin chen sna tshogs la sogs 'dra // (k. 50cd) sna tshogs zhes bya ba ni mam pa tha dad pa la bya ste / de ni yang dag par na gcig gi rang bzhin dang 'gal lo // nam pa de dag ji snyed par rang bzhin yang de snyed de / rang bzhin tha dad pa'i mtshan nyid ni dngos po tha dad pa'o //

⁶⁵ vijñānam āgrhītacitra°] W V, vijñānagrhītacitra° MsC, viānājñam āgrhītacitra° T.

1.2.2.2.1.3. 瑜伽行派の多様不二論批判

1.2.2.2.1.3.1. 多様不二論者：多様に顕現する識は単一である。瑪瑙のように。

【多様不二論者】あるいは、[次のように] 考えられる。識は単一なものに他ならず、多様な形 (citrarūpa) を保持するものである。[一つの] 瑪瑙の宝石 [が多様に] 顕現 [する] 如し⁶⁶。

⁶⁶ MAV 140.11–142.13, 一郷 [1985: 148.12–149.2]: 「宝石の瑪瑙 (mecakamani) のように知識は唯一のものであって、種々なものを把握する」と語る [もう一つの瑜伽行派の] 人々の見解に疑問をさしはさみ次のように述べる。

もしも、種々なもの、それを一つのものとみなすならば、空衣派 (Digambara) の見解と同じではないか。 (k.50ab) これ (もう一つの瑜伽行派の見解) は、空衣派が支持する。

[一つの] ものが多くの性質をふくんでいるとき、[そのものの] 性質は話し手の意志によって [同時に] か、または時を経て] 決められる。同時に言うか、時を経て言うか以外に第三の方法が表現の上にありはしない。

という [クマーリラの] 見解にもとづいたものか、あるいは、それと同様のものである、とするならば、その点でも不合理である。

種々なものは、一を自性とするものではない。種々な宝石等の如し。 (k.50cd)

「種々」(citra) とは、多種 (nānā) の意味であって、それは正しく「一を自性とすること」と矛盾する。それら形象の数と同じだけ [知識の] 自性もある。[一つのものに] さまざまな自性が見られることにより [それが] 多様な存在であるとされる。

MAP 141.9–10 では、この単一の識が多様な形を保持するという見解に関して、*gang dag nor bu gzi bzhiñ zhes bya ba la sogs pa ni rnal 'byor spyod pa gzhan gi lta ba'i dogs pa bsu bar byed de/*と注釈されており、森山 [1992: 104] は、この「他の瑜伽行者の見解」をプラジュニャーカラグプタの見解と同定している。PVA 289.22: *citrābhāsāpi buddhir ekaiva ...*

PV III 207a: *nānārthaikā bhavet tasmāt ...* 戸崎 [1979: 307]: それゆえに、一つ [の感官知] が多数を対象とするはずである。Cf. 沖 [1973], 船山 [2000].

1.2.2.2.1.3.2. Cognition is not one <prayoga 3>.(W 628.8–11; V 460.15–17; T 376.25–377.3; D 230b1–3; P 283b3–5)⁶⁷

tad asat. tathā hi

yac citraṃ⁶⁸ tad ekaṃ⁶⁹ na bhavati yathā nānāsaṃtānavartinah⁷⁰ pratyayāḥ.

citraṃ cedaṃ vijñānam

iti viruddhopalabdhiḥ. citratvenopalambhān nāsiddho hetuḥ. sapakṣe bhāvān na viruddhaḥ.

⁶⁷ MAP 143.6–9: sbyor ba ni hang zhig sna tshogs yi pa de ni gcig pu ma yin te / dper na rin po che rigs sna tshogs pa lta bu'am / dper na sems kyi rgyud sna tshogs la yod pa'i shes pa dag lta bu yin no // mam par shes pa 'di yang sna tshogs pa yin te / rang bzhin 'gal ba dmigs pa yin no //

⁶⁸ citraṃ] W V T, cittam MsP MsC.

⁶⁹ ekaṃ] W V T, eva kaṃ MsP.

⁷⁰ °saṃtāna°] W V T, °saṃtāne MsC.

1.2.2.2.1.3.2. 識は単一ではない。【論証式3】

【立論者】それは正しくない。すなわち、

【論証式3】⁷¹

【遍充関係】およそ多様なもの (citra) は、単一なものではない。たとえば、多数 (nānā) の相続に存する知の如し⁷²。

【主題所属性】そして、この識は多様なものである。

【結論】従って、この識は単一ではない。]

以上は、相反するものの認識 (viruddhopalabdhi) [による論証式である]。[識が] 多様なものとして認識されるから、[多様性という] 証因は不成立 (asiddha) ではない。同類群に [証因たる多様性が] 存在するから矛盾 (viruddha) ではない。

⁷¹ <sādhyaḍharmin>: idam vijñānam

<hetu>: citratā

<sādhyaḍharma>: ekarahitātā

<sapakṣa>: nānāsaṃtānavartināḥ pratyayāḥ

⁷² PV III k. 200cd–201:

citrān tad ekam iti ced idaṃ citrataran tataḥ // 200 //
naikaṃ svabhāvaṃ citraṃ hi maṇirūpaṃ yathaiḥ tat /
nīlādīpravibhāgaś ca tulyaś citrapatādiṣu // 201 //

戸崎 [1979: 301–302]: もし「それ (=多色蝶など) が多色であり、[同時に] 一者である」というならば、それはそれ (=多色蝶など) よりなお不思議である (200 偈)。

それ (=多色蝶などの色) は、[種々の] 宝石 [が集められた場合] の色と同じように多色であるのだから、一つの自性をもつものではない。[集められた宝石や] 多色の布などにおける青などの区別は、また [多色蝶などの色についても] 同様である (201 偈)。

1.2.2.2.1.3.3. Citrādvaitavādin: variegatedness and oneness are not contrary.(W 628.12–13; V 460.17–18; T 377.3–4; D 230b3; P 283b5–6)⁷³

katham punaś citraikatvayor virodho yena citratvam ekatvam apanayed iti cet.

1.2.2.2.1.3.4. Because variegatedness involves plurality, it is contrary to oneness. Example of agate is unsuitable.(W 628.13–21; V 460.18–24; T 377.4–13; D 230b3–6; P 283b6–284a2)⁷⁴

ucyate, na hi nānāsvabhāvavyatirekeṇānyac citraśabdābhidheyam asti. nānaikatvayoś cānyonya⁷⁵ - svarūpavyavacchedanāntarīyakatvāt⁷⁶ parasparaparihārasthiti⁷⁷ -lakṣaṇo virodha iti siddho virodhaḥ⁷⁸. viruddhayor apy ekasvabhāvatve sakalaṁ viśvam ekaṁ dravyaṁ syāt. tataś ca sahotpādavinaśādiprasaṅgo durnivāraḥ. anyathā nāmamātram eva syād ekaṁ iti. na ca nāmni vivāda iti nānaikāntikatā ca hetoḥ. dṛṣṭānto mecakamaṇipratibhāsaś tāvat siddha ity api na vaktavyam. tatrāpy ekarūpatve nānārūpatayāvyāptatvena nānārūpāvabhāsitvādyanupapattes tulyaparyanuyogatvāt.

⁷³ MAV 144.1–11: gzhan yang

sna tshogs gcig pu'i rang bzhin na // sna tshogs ngo bor snang ba dang //

bsgribs dang ma bsgribs la sogs pa // tha dad 'di ni ji ltar 'gyur // (k. 51)

rin po che gzi la sogs pa la sna tshogs kyi ngo bo gcig pu'i bdag nyid du gyur na mam pa tha dad pa'i mam pa snang ba dang 'gal lo // de ni tha dad pa'i bdag nyid du 'khrul ba med de / rin po che'i mam pa tha dad pa dang mtshungs so //

tha dad pa med pa'i phyir gcig bsgribs pas thams cad bsgribs par yang 'gyur ro // de bzhin du gcig rtogs pas thams cad rtogs pa la sogs par 'gyur ro //

⁷⁴ MAP 143.11–19: rang bzhin sna tshogs pa ma gtogs pa gzhan sna tshogs pa'i sgrar brjod par bya ba ni med do // sna tshogs pa dang gcig pa gnyis kyang ngo bo phan tshun mam par gcad pa med na med pa yin pa'i phyir phan tshun spangs te gnas pa'i mtshan nyid kyi 'gal ba yin pas 'gal ba 'grub po // 'gal ba gnyis kyang rang bzhin gcig pa nyid yin na ni 'gro ba mtha' dag rdzas gcig tu 'gyur te / de'i phyir lhan cig skye ba dang 'jig pa la sogs par thal bar 'gyur ba bzlog dka'o // de lta ma yin na ni gcig ces bya ba ming tsaṁ kho nar 'gyur te / ming la ni brtsad pa med pas gtan tshigs ma nges pa nyid ma yin te /

⁷⁵ cānyonya°] W, anyonya° V T.⁷⁶ °vyavacchedanāntarīyakatvāt] W V, °vyavacchedāntarīyakatvāt T.⁷⁷ °sthiti°] W V, °sthita° MsC T.⁷⁸ virodhaḥ] W V T, viruddhaḥ MsC.

1.2.2.2.1.3.3. 多様不二論者：多様性と単一性とは相反しない。

【多様不二論者】しかし、どうして多様性と単一性が相反しようか。もしそうならば、多様性は単一性を排斥しようか⁷⁹。

1.2.2.2.1.3.4. 多様性とは多数性であるから、単一性とは相反する。瑪瑙の喩例も不適切である。

【立論者】[次のように]答える。というのも、多数性 (nānāsvabhāva) を除いて、「多様な」(citra) という語によって表現されるものは他にないからである⁸⁰。そして、多数性 (nānātva) と単一性とは、相互の自体を排除することと不可分離の関係にあるから、相互に排除することによって存立することの特徴とする相反 [関係にある]⁸¹。従って、[多数性と単一性との] 相反が成立する。相反するにも関わらず、一つの自性を持つならば、一切が全て一つの実体となってしまう。そしてそれ故、生起と消滅が同時に存在してしまうことなどは否定しがたい。そうでなければ (=多数性と単一性が相反しないならば)、「単一な」(eka) というのは単なる名称にすぎないものになってしまう。しかし、名称に関して議論はないので、[多様性という] 証因は不定 (anaikāntika) ではない⁸²。

そもそも、「瑪瑙の宝石の顕現」という喩例が成立する、とも述べられるべきではない。それ (瑪瑙の宝石) についても、単一であるならば、多数性 (nānārūpatā) によって遍充されないから、多数のもの (nānārūpa) として顕現することなどはありえないので、[上と] 同じ詰問がつきまとうからである。

⁷⁹ MAV 144.1–11, 一郷 [1985: 149.2–11]: なおまた

種々なものが、一を自性とするものであるならば、種々な性質としての顕現、ならびに、おおわれたもの、おおわれていないもの、という相違がどうして存在しよう。(k. 51)

宝石の瑪瑙等にみられる種々性が、一を自体とするものであれば、種々な形象の顕現と矛盾する。しかし、それが、多を自体とするものであることに、まちがいはなく、宝石の種々性と等しい。

[種々なものが一を自性とするものであるならば] 相違がないゆえ、一ヶ所をおおえばすべてをおおうことにもなってしまう。同様に、一つのことがわかればすべてのことがわかってしまう等 [の誤謬] になる。

⁸⁰ 対論者は citratva を主張するが、立論者は citratva を nānātva と同義のものとして捉える。ダルマキールティによると、citratva は認識において、nānātva は外界対象において成立する。Cf. 沖 [1973]。

⁸¹ parasparaparihāraṣṭhītilakṣaṭā の用語に関しては、-sthiti-と-sthita-とが混在する。-sthiti-は特に後代の文献に見られ、また PVSV 自体にも確認される。PVSV 5.14–15: anyonyopalabdhīparihāraṣṭhītilakṣaṇatāyā vā virodho nityānityatvavat. 但し、この部分をカルナカゴーミンは sthita と注釈する。PVSV 36.17–19: anyonyopalabdhīḥ parasparapratipattis tasyāḥ parihāro vivekas tena sthitaṃ lakṣaṇaṃ svarūpaṃ yayos tau tathoktau. また、ダルマキールティの著者に限れば、-sthita-の用例が多く確認される。NB III k. 75: parasparaparihāraṣṭhītilakṣaṇatāyā vā bhāvābhāvat. VN 15.7–8: tayor vastuni parasparaparihāraṣṭhītilakṣaṇatvenaikatyaḥ āparopādānanāntarīyakatvāt. PVin III. Cf. Kiyuma [1999: 225, fn. 2], 渡辺 [2002: 77, fn. 58]。

⁸² 論証式 3 の sādhyadharmā (=ekarahitā) における eka という語がもし名称にすぎないものであるならば、単一性と多数性とは相互に排除することによって存立することの特徴とする相反関係にないことになる。その場合には、証因である多様性 (=多数性) は同類群である「多数なもの」に存在するだけでなく、異類群である「単一なもの」にも存在することになり、証因は不確定証因となってしまう。しかしながら、そのような名称に関する議論はないので、当該論証式の証因は不確定ではない。

1.2.2.2.1.3.5. Citrādvaitavādin: one thing that is variegated and nondual appears on direct perception.

(W 628.22–27; V 460.24–27; T 377.13–19; D 230b6–231a1; P 284a2–5)

atha syāt. pratibhāsamānasya nīlāder deśakālāntarasthāt padārthān na bhedaḥ pratyakṣeṇa pratīyate, dvayor apy⁸³ apratibhāsanenaitasmād idaṃ bhinnam ity agrahāt. nāpi samānakāladeśasthāt pratibhāsamānāt. asmād idaṃ bhinnam iti nirvikalpatayā⁸⁴ pratyakṣeṇāgrahāt. tasmād grāhyagrāhakayor grāhyāṇāṃ ca parasparaṃ bhedāgrahāc citrādvayam evaika rūpaṃ⁸⁵ pratyakṣe pratibhāsata iti.

1.2.2.2.1.3.6. Oneness and variegatedness are contrary.

(W 628.27–28; V 460.28; T 377.19–20; D 231a1–2; P 284a5–6)

tad apy etenaiva pratyuktam ekasya citratvavirodhāt.

⁸³ dvayor apy] MsC, dvayor W V T.

⁸⁴ iti nirvikalpatayā] em. (Cf. zhes rtog pa med pa'i mngon sum gyis mi 'dzin pa'i phyir ro Tib.), iti pratyayo nirvikalpatayā MsC, iti pratyayo 'sti nirvikalpatayā W V T.

⁸⁵ evaika rūpaṃ] W V T, evaikaṃ rūpaṃ MsC.

1.2.2.2.1.3.5. 多様不二論者：多様にして不二なる単一なものが直接知覚に顕現する。

[次のような反論が] あろう。

【多様不二論者】[認識に] 現に顕現している青など (能取) が, [それとは] 別の空間と時間とに存在している [外界の] もの (青など=所取) と異なることは, 直接知覚によつては理解されない。両方とも [同じ時間と空間とに] 顕現しているのではないので, 「これはそれとは異なる」とは把握されないからである。また, [現に顕現している青などは,] 同じ時間と空間とに存在している現に顕現している [青など以外の] ものとも [異なることは, 直接知覚によつては理解され] ない。[直接知覚は] 無分別であるから, 「これはそれとは異なる」とは, 直接知覚によつて把握されないからである⁸⁶。従つて, 所取 (外界対象) と能取 (対象の顕現) が, また [認識に同時に顕現する] 諸々の把握されるべきもの (認識対象) が相互に異なることが把握されないから, 多様にして不二 (citrādvaya) に他ならない単一なものが直接知覚に顕現する。

1.2.2.2.1.3.6. 単一性は多様性と相反する。

【立論者】以上の主張も, 上述の [論理] によつて既に否定されている⁸⁷。単一なものは多様性と相反するからである。

⁸⁶ 「[直接知覚は] 無分別であるから, 「これはそれとは異なる」とは, 直接知覚によつて把握されないからである」 (asmād idaṃ bhinnam iti nirvikalpatayā pratyakṣeṇāgrahāt) という文言に関して, 写本や他のエディションでは, iti の直後に pratyayo ないし pratyayo 'sti があつたが, 直前の 「「これはそれとは異なる」とは把握されないからである」 (etasmād idaṃ bhinnam ity āgrahāt) という文言との整合性もふまえて pratyaya を, 文脈から判断して asti を削除して和訳に反映させなかった。なお, チベット訳もこの理解を支持している。

⁸⁷ Cf. 1.2.2.2.1.3.4.

1.2.2.2.1.3.7. Citrādvaitavādin: one cognition shares the same fate as various ākāras.

(W 629.1; V 460.28; T 377.20–21; D 231a2; P 284a6)

athābhinnayogakṣematvāc citram apy ekam.

1.2.2.2.1.3.8. If one cognition shares the same fate as various ākāras, distinction between them doesn't appear. Advayañānavāda (nondual cognition theory) is not established.

(W 629.1–9; V 460.29–461.2; T 377.21–378.5; D 231a2–5; P 284a6–b2)

tad ayuktam. anyonyavyāvṛttarūpatvenāsyāikatavairodhāt. na cāsyānenābhinnayogakṣematvaṃ ⁸⁸ pratyakṣeṇāvagamya. yugapatpratibhāsasyā ⁸⁹ -bhinnayogakṣemarūpatve ⁹⁰ svarūpānyatvasyāpi pratibhāsanāt katham na bhedapratibhāso bhavet. yadi ca bhedasyāgrahād advaitaṃ kalpyate tadābhedasyāsmād idam abhinnaṃ ity evaṃrūpasyāgrahāt ⁹¹ dvaitaṃ kiṃ na kalpyate ⁹². atha bhedābhedavinirmuktaṃ vastumātraṃ grhyate katham tarhi nīlādeś citrasya ca pratibhāsaḥ. citraś cet pratibhāsa iṣyate sa eva loke bhedapratibhāsa ucyata iti katham bhedāpalāpaḥ.

⁸⁸ cāsyānenābhinna°] W V, cāsyānena bhinna° T.⁸⁹ yugapatpratibhāsasyā°] W V, yugapat pratibhāsasyā° T.⁹⁰ °rūpatve] W V T, °rūpatvena MsC.⁹¹ evaṃrūpasyāgrahāt] W V, evaṃrūpasyāgrahāta MsC, evaṃ rūpasyāgrahāt T.⁹² kalpyate] W V T, kalpate MsP.

1.2.2.2.1.3.7. 多様不二論者：単一の識は多様な形象と運命を共にする。

【多様不二論者】「識は顕現と」運命を異にしないから、多様であっても単一である。

1.2.2.2.1.3.8. 運命を共にするならば、単一の識と多様な形象とには差異は顕現しない。知不二論は成立しない。

【立論者】それは不合理である。相互に排除し合うものであるので、これ（多様な顕現）は単一性と相反するからである。また、それ（単一の識）がこれ（多様な顕現）と運命を異にしないことは、直接知覚によっては理解されない。同時に顕現「する識」が「多様な顕現と」運命を異にしないものならば、「識」自体の別異性も顕現するから、どうして「識に」差異が顕現しないことがあるのか⁹³。また、もし「識の」差異が把握されないから「識の」不二が構想されるならば、その場合、「これはそれとは異なる」という形で「識の」無差異が把握されないから、「識は」二であるとして構想されないのか。もし、差異と無差異とから離れた単なる事物（vastumātra）⁹⁴が把握されるならば、その場合、どうして青などの多様なものが⁹⁵顕現するのか。もし、「識の」顕現は多様である」と主張するならば、まさにそれ（多様な顕現）が世間において「差異の顕現」（bhedapratibhāsa）と呼ばれるのだから、どうして「識のもつ」差異を否定できようか。

⁹³ Cf. 岩田 [1983].

⁹⁴ vastumātra については、桑月 [2018]を参照。

⁹⁵ ca はすべての ed.にあるものの、その位置では意味を成さないので省いて解釈した。尚、Tib.では nyid du となっており、写本が citrasyaiva であった可能性もある。

一次文献

- AAA See W, V, T.
- D sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
- LAS *Laṅkāvatārasūtra: The Laṅkāvatāra sūtra*, ed. Bunyiku Nanjo, Kyoto: The Otani University Press, 1923.
- MA *Madhyamakālaṃkāra (Śāntarakṣita): Madhyamakālaṃkāra*, ed. Masamichi Ichigo, Kyoto: Bun'eido, 1985.
- MAP *Madhyamakālaṃkārapañjikā (Kamalaśīla)*: See MA.
- MAV *Madhyamakālaṃkāravṛtti (Śāntarakṣita)*: See MA.
- NB III *Nyāyabindu*, chapter III (Dharmakīrti): *Paṇḍita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa: Being a sub-commentary on Dharmottara's Nyāyabinduṭīkā, a commentary on Dharmakīrti's Nyāyabindu*, ed. Dalsukhabhai Malvania, Tibetan Sanskrit Works Series Vol. 2, Patna: Kashi prasad Jayaswal Research Institute, 1955.
- P Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
- PV III *Pramāṇavārttika*, chapter III (Dharmakīrti): See 戸崎 [1979].
- PVA *Pramāṇavārttikālaṃkāra (Prajñākaragupta): Pramāṇavārttikabhāṣyam or Vārttikālaṅkāraḥ of Prajñākaragupta: Being a commentary on Dharmakīrti's Pramāṇavārttikam*, ed. Rāhula Sāṅkṛtyāyana, Patna: Kashi prasad Jayaswal Research Institute, 1953.
- PVin III *Pramāṇaviniścaya*, chapter II (Dharmakīrti): *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya, chapters 1 and 2*, ed. Ernst Steinkellner, Beijing – Vienna: China Tibetology Publishing House and Austrian Academy of Sciences Press, 2007.
- PVSV *Pramāṇavārttikasvavṛtti (Dharmakīrti): The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the first chapter with the autocommentary: text and critical notes*, ed. Raniero Gnoli, Serie Orientale Roma 23, Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1960.
- PVSVT *Pramāṇavārttikasvavṛttiṭīkā (Karaṇakagomin): Karaṇakagomin's Commentary on the Pramāṇavārttikasvavṛtti of Dharmakīrti*. ed. Rāhula Sāṅkṛtyāyana, Allahabad: Kitāb Mahal, 1943, repr. Kyoto: Rinsen, 1982.
- T *Abhisamayālaṃkāṛāloka (Haribhadra): The Abhisamayālaṅkāṛāloka of Haribhadra: being a commentary on the Abhisamayālaṅkāṛā of Maitreyaṇātha and the Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā*, ed. Giuseppe Tucci, Baroda: Gaekwad's Oriental Series No. XLII, Baroda, 1932.
- TS *Tattvasaṃgraha (Śāntarakṣita): Tattvasaṃgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Shri Kamalashīla*, 2 vols., ed. Swami Dwarikadas Shastri, Bauddha Bharati Series 1, 2, Varanasi, 1968.
- TrBh *Triṃśikāvijñaptibhāṣya (Sthiramati): Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya*: Critical Editions of

- the Sanskrit Text and its Tibetan Translation, ed. Hartmut Buescher, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Tib. Tibetan translation
- V *Aṣṭasāhrikā Prajñāpāramitā With Haribhadra's Commentary Called Āloka*, ed. P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts 4, Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1960.
- VN *Vādanyāya* (Dharmakīrti): *Dharmakīrtis Vādanyāyaḥ*, ed. Michael Torsten Much, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1991.
- W *Abhisamayālaṃkāṛāloka* (Haribhadra): *Abhisamayālaṃkāṛāloka Prajñāpāramitāvyākhyā* (Commentary on *Aṣṭasāhrikā-prajñāpāramitā*) by Haribhadra. Together with the Text Commented on, ed. Unrai Wogihara, Tokyo: The Tokyobunko, 1932–1935.

二次文献

江崎公児

- [2005] 「ダルマキールティによる差異の定義について—‘viruddhadharmādhyāsa’とは何か—」, 『比較論理学研究』 2, pp. 39–46.

現観莊嚴論光明研究会

- [2019] 「*Abhisamayālaṃkāṛāloka* XVI における「離一多自性論証」の和訳 (1) —極微論を中心に—」, 『インド学チベット学研究』 23, pp. 119–144.

一郷正道

- [1985] 『中観莊嚴論の研究—シャーンタラクシタの思想—』, 文栄堂.
- [2015] 『ハリバドラの伝える瑜伽行中観派思想』, 東本願寺出版.

岩田孝

- [1981] 「Śākyamati の知識論」, *Philosophia* 69, pp. 143–164.
- [1983] 「Prajñākaragupta(PVBh)に於ける有形相知識説に関する一考察」, *Samhāṣā* 5, pp. 39–67.

沖和史

- [1973] 「Dharmakīrti の《citrādvaita》理論」, 『印度学仏教学研究』 21-2, pp. 88–94.

桑月一仁

- [2018] 「『菩薩地』『真実義品』における vastumātra の意味—有と無との対論—」, 『印度学仏教学研究』 66-2, pp. 154–157.

Kyuma, Taiken

- [1999] “bheda and virodha,” *Dharmakīrti's Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, pp. 225–232.

佐藤智丘

- [2015] 「前六識の俱生—『五蘊論』安慧釈をもとに—」, 『印度学仏教学研究』 63-2, pp. 106–109.

船山徹

- [2000] 「ダルマキールティの六識俱起説」, 『インドの文化と論理：戸崎宏正博士古稀記念論文集』, pp. 319–346.

戸崎宏正

- [1979] 『仏教認識論の研究——法称著『プラマーナ・ヴァールツティカ』の現量論』 上巻, 東京：大東出版社.

森山清徹

- [1992] 「後期中観派と形象真実論・形象虚偽論—Śākyabuddhi, Prajñākaragupta, Kambala—」, 『印度学仏教学研究』 41-1, pp. 102–108.

渡辺俊和

- [2002] 「Dharmakīrti の非認識論—相反関係を中心に—」, 『南都佛教』 82, pp. 54–80.

An Annotated Translation of the Neither-one-nor-many Argument in *Abhisamayālaṃkāṛālokā* XVI (2): The Criticism of *advayajñāna*

Summary

This paper is the second part of an annotated translation of the neither-one-nor-many argument in Chapter XVI of the *Abhisamayālaṃkāṛālokā* by Haribhadra. In this section Haribhadra first proves that the nature of ‘being devoid of either one or many intrinsic natures’ is a valid reason to demonstrate that entities ultimately have no intrinsic nature (i.e., are empty). He shows that the logical reason is not unestablished (*asiddha*) in the subject of the thesis (*pakṣa-dharmin*) by examining every possible subject of the thesis, dividing it into *jñeya* and *jñāna*. In the previous paper we dealt with the section on *jñeya*, in which atomic theory is examined. In this paper we investigate the section on *jñāna*, which criticizes *satyākāravāda* and *citrādvaitavāda*.

Synopsis

0. <prayoga 1>Entities ultimately have no intrinsic nature (i. e., are empty) because they are devoid of either one or many natures.
1. The logical reason is not unestablished (*asiddha*).

- 1.1. What is an “entity”? That which effects a purposeful action.
- 1.2. An entity is either *jñeyarūpa* or *jñānarūpa*.
- 1.2.1. An entity as *jñeyarūpa*: the examination of atomic theories.
- 1.2.1.1. Criticism of Vaiśeṣika theory of atoms (criticism of *avayavin*).
- 1.2.1.2. Criticism of Vaibhāṣika theory of atoms <prayoga 2>.
- 1.2.1.3. Criticism of Sautrāntika theory of atoms.
- 1.2.1.4. Criticism of Śubhagupta theory of atoms.
- [Conclusion: Entity as *jñeyarūpa* (= external object) is neither one nor many.]

(Above portion of synopsis was treated in previous paper)

- 1.2.2. Entity as *jñānarūpa*: the examination of Yogācāra’s *ākāravāda*.
- 1.2.2.1. Yogācāra: *advayajñāna* (nondual cognition) is one, and *ākāras* appear there.
- 1.2.2.2. Are *ākāras* real or unreal?
- 1.2.2.2.1. Criticism of Yogācāra’s *satyākāravāda*.
- 1.2.2.2.1.1. Because *ākāra* is multiple, cognition is multiple, and *advayajñānavāda* (nondual cognition theory) is denied.
- 1.2.2.2.1.2. Criticism of Yogācāra theory of simultaneous occurrence of many homogeneous cognitions.
- 1.2.2.2.1.2.1. Śākyabuddhi: many homogeneous cognitions occur simultaneously.
- 1.2.2.2.1.2.2. The application of criticism of atomic theories.
- 1.2.2.2.1.2.3. If many cognitions occur simultaneously, conceptual cognitions don’t occur successively.
- 1.2.2.2.1.3. Criticism of Yogācāra *citrādvaitavāda*.
- 1.2.2.2.1.3.1. Citrādvaitavādin: Cognition appearing variously is one like agate.
- 1.2.2.2.1.3.2. Cognition is not one <prayoga 3>.
- 1.2.2.2.1.3.3. Citrādvaitavādin: variegatedness and oneness are not contrary.
- 1.2.2.2.1.3.4. Because variegatedness involves plurality, it is contrary to oneness. Example of agate is unsuitable.
- 1.2.2.2.1.3.5. Citrādvaitavādin: one thing that is variegated and nondual appears on direct perception.
- 1.2.2.2.1.3.6. Oneness and variegatedness are contrary.
- 1.2.2.2.1.3.7. Citrādvaitavādin: one cognition shares the same fate as various *ākāras*.
- 1.2.2.2.1.3.8. If one cognition shares the same fate as various *ākāras*, distinction between them doesn’t appear. *Advayajñānavāda* (nondual cognition theory) is not established.

キーワード 離一多自性論証, 不二知, ハリバドラ, *Abhisamayālaṃkāṛāloka*